表紙, 目次, 雑纂, 漫録, 通信

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-04 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/38548

明治三十九年五月二十八日發行

十全會雜誌

第四十一號

《非賣品》

金澤醫學專門學校十全會

十全會雜誌第四十一號目次

○原著及實驗

○虹彩ノ肉腫　醫學博士　高安右人

○横隔膜破裂ノX放線診斷　特別會員　吉田幡誠

○先天性心臟病（先天性肺動脈口狹窄等）之一例　特別會員　齋藤傳平

○雜纂

○在臺實驗……中川幸庵

○漫錄

○二雨會詠草……諸　仝　人

○花もみち……二雨會仝人

○會報

○新入特別會員○特別會員陸海軍醫の動靜○特別會員動靜○寒稽古記事○第三十六回十全會講話例會兼第九師團凱旋衛生部員招待會記事○四年級々會兼七五三中尉歡迎會○第二年級第二次級會○第七回北陸聯合醫學會○第三回釋尊降誕會

○通信

○佐々木教授第三信○齋藤義雄君通信

○會告

○寄贈及交換書目○會費領收

○廣告

○數件

○後のうたかたの記

つゝじ咲く頃より酒うまからずとは露伴子のいへりしところ、あゝ實に初夏の天地の我等を傷ましむる事の何ぞ多きや、若葉の影うす暗うして夏雲漸くむし來らんとす、哀別の涙、離別の悲、まだ乾きやらずして、こゝに石川壽人君の退學と、淺井茂雄君の訃とを傳ふるにいたりぬ。さきには丹羽、島田、高峯、山中、岡の六君と別れ、今はまた此二君と別る。兼好法師のつゞりたりけん、あだし野の露、鳥部山の煙、たゆるひまなきとは、今更ながら人世の無常を徹底せしむる心地ぞせらる。あゝ蛙なく夕、石君の尺八を偲び、大きく遠く闇を縫ふ螢を觀ては、淺君の靈を思ふ。希くは一は向上の理性を固くし、一は長へに薫風ゆらぐ蓮の臺に我等の穉情を冥護せよ。《釣雪生》

謹告

回顧スレハ前キノ本校教授(現ニ京都醫科大學教授)醫學博士鈴木文太郎君就職ノ當時、諸般ノ設備尚甚ダ幼稚ニ屬シ、書籍標本ハ勿論、其他授業上ノ用具ニ到ルマデ多クハ藩末ノ遺產ニ係ル頽癈物ニ過ギザリキ。然ルニ君ハ深淵ナル學識ト天賦ノ妙技ヲ以テ此機運ニ處シ敢テ誤ラズ、日夜之レ努メ、在ルコト三年ニ滿タズシテ本校基礎醫學ニ今日ノ基ヲ樹テラル。殊ニ君ハ學生涵養ニ向ツテ獨特ノ智囊ヲ有シ、恩威両ナカラ全ク、學生亦タ慈父母ノ如ク君ニ畏服セシコトハ、當時君ニ親炙セシモノノ洽ク知ル所トス、依テ吾人後輩ハ今茲ニ聊カ左ノ方法ヲ設ケ君カ偉功ヲ本校ト共ニ永ク傳ヘント欲ス、有志ノ諸君競フテ此擧ニ賛助アランコトヲ希望ス。

一鈴木博士半身肖像ヲ匾額ニ製シ本校ニ掲ク

一有志醵金ハ一人金五錢ヨリ三十錢マデトス

一醵金ハ本校十全會會計部ニ御送附ノコト

一醵金〆切ハ明治三十九年七月末日

一醵金額及姓名ハ十全會雜誌ヲ以テ時々廣告スルノ外別ニ受領證ヲ發セズ

一事業終局後決算表ヲ製シ十全會雜誌ヲ以テ廣告ス

一若シ醵金額ニ剩餘ヲ生ズレバ書籍其他ノ物品ニ代ヘ本校十全會ニ寄附ス

明治三十九年五月

發起人　金子治郎
　　石川喜直
　　三木三郎

醫學博士金杉英五郎先生題辭
醫學博士芳賀榮次郎先生序文

今井亥三松先生編述

耳科衛生

全壹冊

洋裝本綴美麗　金文字入
精密圖五個挿入　紙質上等
正價金參拾五錢　郵稅金四錢

世ニ衛生ヲ論スル著書多シト雖モ、耳科衛生ヲ說クモノ無キハ甚タ遺憾ナリ、況ンヤ我邦耳科學ノ幼稚ナルニ於テヲヤ、本書ハ編者ガ日常不幸ナル耳病者ニ接シ、其得タル處ノ經驗ヲ骨子ト爲シ、耳ヲ保護シ耳病ヲ未發ニ豫防スルニ當リ、注意スベキ要項ハ細大漏サズ、頗ル周到着實、極メテ平易懇篤ニ博採記述セル空前ノ好書ニシテ、世ノ人士一本ヲ坐右ニ備ヘナバ衛生上裨益スル事、蓋シ鮮少ニアラサルベシ

耳科衛生內容綱目ハ

第一章聽器の構造及機能◎第二章耳病と諸般の關係▲耳病と年齡の關係▲耳病と男女の關係▲耳病と時候の關係▲耳病の發する時期▲耳病と職業の關係▲耳病と遺傳の開係附聾◎第三章耳病の徵候▲聽力障害▲耳鳴▲耳漏▲耳性眩暈▲▲耳痛◎第四章初生兒耳の衛生▲▲初生兒耳の保護▲初生兒耳の防護▲初生兒寒冒の注意▲▲幼兒耵聹蓄積の害▲初生兒入浴時の注意▲▲初生兒哺乳時の注意▲初生兒耳部掌打及接吻の禍害◎第五章兒童耳の衛生▲學齡兒童の聽力▲▲耳內異物の危險▲▲耳內創傷の結果▲游泳、海水浴、入浴の注意◎第六章一般耳の衛生▲耳內創傷▲耳病と飲酒▲▲耳病と喫煙▲耳病と藥劑▲耳の洗滌法▲▲聽器の人工補助◎第七章耳病と他疾患▲傳染病と耳病▲眼病と耳病▲鼻及鼻咽腔疾患と耳病▲齒牙疾患と耳病▲消化器疾患と耳病▲泌尿器疾患と耳病▲梅毒と耳病◎第八章耳病の注意

發行所　東京市本鄉區春木町三丁目（電話下谷五七番）　南江堂支店

賣捌所　東京　南江堂、丸善○名古屋　丸善○大坂　丸善、松村○廣島　田中、積善館

雜纂

○在臺實驗

中川幸庵

三、麻刺利亞ニ併發セル膿胸ノ一例

年齡十一ヶ月ノ男兒、父母共ニ健存ス父ハ內地人ニシテ母ハ臺灣土人ナリ、生來强壯明治三十七年九月臀部火傷ニテ一週間余入院シタルコアルノミ、然ルニ十月末頃ヨリ時々熱發シ機嫌良ナラス啼泣之レ事トスト、十一月初メヨリ外來診察所ニ來タリ診療ヲ受ク其時ノ診斷ハ麻刺利亞ニシテ「オイヒニン」ヲ投與シタリ、此頃亦少許ノ咳嗽ヲ發セリト雖トモ毫モ胸部ニ於テ他覺的變狀ヲ發見スルコト能ハス、十一月九日ニ至リ初メテ右胸下部濁音ヲ呈シ呼吸音幽微ナルコトヲ認メ、肋膜炎合併セリトシテ揚曹劑ヲ兼用セシメタリ、然レトモ右胸ノ變化ハ次第ニ增進シ熱亦去ラサルヲ以テ入院加療ヲ諭シタリ、

十一月十三日入院、体格中等營養不良皮膚蒼黃色貧血シ頭蓋著シク大ナル一小兒ニシテ右胸側ハ一般ニ眞濁音ヲ呈シ呼吸音ハ全ク消失シ聲音振盪モ亦消失セリ、左肺ニモ心臟ニモ理學的變狀ヲ徵知セス脾臟ハ著シク腫大シテ季肋弓下ヲ超出スルコト三指橫徑ニ達セリ、

處方

「オイヒニン」○、四　乳糖○、二　分二包朝夕一包宛

揚曹　○、七　比林　○、三　杏仁水　一、○

單舍　五、○　水　三○、○　右一日三回服用

十一月十四日、咳嗽、苦悶ス

十一月十五日、咳嗽頻發シ呼吸困難ニシテ苦悶ノ狀ヲ呈シ時々吐乳ス

午后一時右胸第五肋間前腋窩線ニ於テ穿刺ヲ試ミ膿液ヲ得タリ仍テ外科部ニ送ル

十一月十六日、午后一時外科部ニ於テ肋骨切除術ヲ施スケーニヒ氏法ニ仍リ第六肋骨ヲ切除シ排膿ス、皮膚切開約七仙迷、肋骨三仙迷ヲ切除ス、排膿五○○、○瓦黃

綠色ノ膿ナリ、

處　方（前二方ヲ止メ）

鹽里母　三〇、〇　「ストロファンツス」丁幾　三滴

一日三回服用

術后時々咳嗽アリト雖トモ安樂ノ狀アリ

十一月十七日、咳嗽稍減退ス

十一月十八日、午后二時熱發々作ス「フエナセチン」〇、二ヲ其際投與セリ、夜間咳嗽多シ

十一月十九日、午后二時再ヒ熱發々作セリ亦「フエナセチン」ヲ與フ

十一月二十日、「オイヒニン」〇、六「フエナセチン」〇、三分二包朝夕八時ニ分服セシム、排膿管挿入ヲ止ム、熱發ナシ、咳嗽甚タ輕減シ安眠ヲ得

十一月二十一日、「オイヒニン」〇、四「フエナセチン」〇、二　分二包トス

快方

十一月二十二日、快方

十一月二十三日、午后熱發セリ

十一月二十四日、穿刺部膿瘍ヲ形成シ皮下蜂窠織炎ニ轉セントスルノ傾向アルヲ以テ切開セリ

午后輕度熱發々作アリ

十一月二十五日、「オイヒニン」ヲ服用セシム、熱發ナシ

十一月二十六日、快方

十一月二十七日、快方、脾腫縮小セリ

午后次第ニ快方ニ赴キ十一月三十日全治退院セリ

之レ臺南醫院研究病室燒失（十一月十一日）ノ際ニシテ血液檢査並ニ膿液ノ精檢（顯微鏡上及ヒ培養上ノ）ヲ欠クト雖トモ前記ノ病床日誌並ニ溫度表ニ仍レハ麻刺利亞兼膿胸ナルコト一点ノ疑ヲ入ルヽヘキナシ（溫度表略ス）

麻刺利亞ニ膿胸ヲ併發スルコトアリヤ否ヤニ就テハ余カ二三ノ成書ニ付キ麻刺利亞並ニ膿胸ノ章ヲ涉覽シタルモ此關係ニ對シテハ毫モ記載アルヲ見ス蓋シ之レ頗ル稀有ノモノナラン」、臺灣ニ於テハ屢麻刺利亞肺炎（麻刺利亞＋肺炎）ヲ目擊スルヲ以テ此膿胸ハ其原因タル肺炎ノ

深在性ナリシ爲メ他覺的ニ之ヲ証明スルコト能ハサリシモノニシテ則チ Metapneumotische Empyéme. ニ屬スベキモノナルベシ(?)

＊　＊　＊　＊　＊

＊　＊　＊　＊　＊

漫録

○二雨會詠草

歌人粹士のすなる雅會といふものを、われらもしてみんと試みに思ひ立つ。そも二雨會とは去ぬる年の夏頃なりけむ、越路の空にゆきゝする雲の雌をたしあけて、降り來れるものなれど、會とは名のみ、たとへば野邊の名なし草、花も實もなくて冬枯れぬ。

月日の小車よどみなくめぐりて、梓弓春たちくれば、人の心もおのづ浮きたつものから、この小さなる若草の生ひたちを圖らんとするもの、此に冷翠先生を會頭に仰ぎ、同じ好みの風流男九人。やがては色とりどりの花に出て、北越の野に錦をそへむ。（よし雄）

金原冷翠

春一夜怨じて明けぬ紅の花の小櫛は涙にあせて

如何なれば西施恥らふ御姿緋桃の影に笑顔さびしき

古社ぬかつく禰宜か銀髯に朝風さむし白梅の里

塚本春山

甘き夢は短かかりけり夏の夜の去年のことしに似るらんものか

さびしきは若草の園の夕やみにさゝれ池水風そよぐとき

德久翠子

星とよばれすみれと呼びつ詩の苑に神とみたりの笑あたゝかき

ちる花は春の女神のうたの謎解せず逍遙ふわれ面はゆき

林琴柱

猪さいていざ豪飲の興あらむ吹雪の山路超ゑて來し友

樽枕明日のいづれを問ふをやめよ書はいとし妻劒いとし子

筆の墨黄ばむ前齒にかみしめて世を罵る子面やつれた

り

戀の歌皆やきすて丶二十男韓の畑に鍬をとるかな

彩羽袖花より花に細語の戀の使のあげ羽蝶かな

中村陽炙

色あせし櫻の花片池にれちて波れだやかに春暮れむとす

詩にうみて詩集枕にまどろむよ夢あたたかき春のま晝を

さと染めし顏の紅葉は乙女子か燃ゆる血汐の時雨に出しか

池邊雨橋

君きませ花籠もちて君きませ屍に匂ふ花つみて見む

（二雨會ひらくとて）

あやめ艸れほきくなりぬ曲水や旭櫻の老樹のもとに

野村雨城

山椒の若葉か青よ萌ゑ出でよ口疼くとて厭ひぬ君は

しこの世に愛の眞珠と高照らば瘦せてかひある我涙かな

この骸こ丶に埋めて我か句彫り石立てなばや花陰の岡

天地の柱くだけんそれまでは筆をすつへき弱きにあらじ

○花もみち

二雨會仝人

◎馬坂十句

釣雪

馬坂や眼中春の臥龍山

春風や馬坂越ゆる病上り

南無大悲不動の瀑や風光る

春月の僧は留守なり不動堂

回向する沈の匂や春の雨

春寒う經讀む堂の灯かな

馬坂や籔鶯の啼いて居る

馬坂の夫婦灯や春の宵

春雨や晝も鎖して松山寺

順禮の歌かく春や松山寺

○野の草

琴柱

◎屠狗の人

珊瑚千樹を車につむも
男の子吾ふむ道をまげんや
王者權勢の槌のもとにも
任せかねたるこれぞこの胸

人ふむべきは義の大道
我身をまかす俠の膚
髯ある子等に拳ふる子も
頼まば敵も今はすくはむ

清醫去にて千餘載
不識庵死して四百年
あゝ義にほこれる扶桑國に
荆軻却て屠狗の人

◎友を送る

春風そぞろに動きて
江山これより笑に入るに
只默然と胸を抱きて
あゝ吾友よいづち去ぬとや

契りは永からず
花さきて花ちりて
月かけて月みちて
折れは春秋只三ッの指

されど君百年の緣も
水ならば何にかせまし
行きずりの袂にも
あまき密は忘られずとか

君が惠は天の甘露
君が情は地の密漿

いつまでもかくと花に醉ひしに
口惜しかりける今日の別れよ

筆とれはろこに匂の色
紙をのぶれはそこに妙なる想
されど高きはゆるされず
されど清きは容れられず

牙をとぎ爪をみがく
さてもはらばふものの多き世や
人の道とく君が后へに
さても敵がのろひの吼

霧ふく三寸の匕首
手向ふものの胸をさけて
贈りし夜半ぞほゝゑみて
君が答の勇ましさ

百畝の蕙九畹の蘭
到る處吾をまてり
去んかな去なんかな
江南再び道とかんと

かくて行く君に尙望あり
のこれる我にうらみあり
三春の蝶夢空しくさめて
好花つひに求むるなし

今送り來つて江頭に立ては
風なきにちる花三四
餞別言葉はてもあへぬに
舟ははやくも霞の中に

○曾遊記片

雨橋

一　片

今目を瞑つて日光の景を回想すると、捕へやうも無い山の容、水の態ゞ、明らかながらさすが朧ろに、此處は

何處と定めもなく、漂ひ去るやうな、奇しき記憶が呼び起さるゝ。

滿目青山、高き空も、落つる瀧津瀨も、すべて綠の深山の裡、一個洋裝の男兒が、夏帽をしつかり頤で留めて、脊中にはござを負ひ、紺の脚絆の甲斐〳〵しく、八汐の杖を右手について、順禮を西洋流の姿が、歷々と見ゆるやうである。

客觀の自分は、足尾を出たが五日の前、炭燒小屋にも一夜の情、獵男が洞にも褥をわけて、登りつ擧ちつ馳せ廻つた、慣れぬ草鞋のつかれ見へて、いま降り坂の繁みに、襟の釦を外し、うれしげに流るゝ汗を拭つたが、見へ隱れする白い洋袴は、木の間をくゞる鳥のごとくに、やゝありて山の麓、平な路、家居の間を拔けて、湖の眞砂の上に立つた。

これころは中禪寺の湖夏景色、涼しき風の髮を吹くよ。

その日日光に詣で、華嚴の巖頭に立つて、遙かに湖心をふり返つた人は、水限の果てにわか姿の豆よりも小さく見へたであらう、湖畔の旅館より双眼鏡を以て眺めた人は、僕が茶店の赤毛布に腰かけて、茗を啜りつゝ何か認めて居つたのゞ見へたであらう、吾が小さき旅日記は、實に歌が濱の寫生と感想とを以て滿たされてある、そして諸君が讀み玉ひつゝあるこの記行は、即ちそれである。

二　片

嗚呼美しい風景の詩!!

日本の美は日光に集つて居る、日光の美は中禪寺に盡きて居る。

両毛の國境と云へば、開闢以來眞に人跡のなかつた所、その新開の地に自分は病を養ふて居た、四月尙ほ殘んの雪の深かつた頃から、木の芽うち煙ぶる五月の空、石楠花匂ふ六月をも暮して、ほとゝきす鳴く時分まで、久しかりつる山住居は、全く山に慣れしめた、否全く飽かしめたのである、朝の峯や、夕ぐれの谿や、古りし木、巨なる巖は青春の男に何の興をも添へぬやうになつた、彼れは餘りゝ靜かである、動かぬのである、自分はこんな

山懷をぬけて、轄然と氣宇の擴大すべき、大平原か然らずんば大洋に遊ばむことを、遂よは思ふてばかり居た。

水と土＝海と山＝との優劣は吾れ知らむやである、しかし世界の四分の三は水ではないか、わが肉体の十分の七は水ではないか、熱き血汐と云ふか、ろは心の泉から湧いた赤い水ではないか、同情の涙と云ふか、そは眸の露ではないか、人は水を慕ふべきさだめを有して居る。

然かし中禪寺湖は、周圍やつと三里であるから、溜め池でも此れ位なのはあるだらう、大さの點にては何の賞する所もない、つまり山と山との峽に水の溜つたものである、けれども—山と水—山嶽重疊の間に綺麗な水—山骨怪巖の寒楚な色よ照り對ふ明鏡の面、言ふべくんば梅櫻の花の心に取り卷かれた雌蕋の誇り、譬へば是れ逞ましく凄まじき荒男の席に、一個優麗可憐の人を見るのれもひがある。

三　片

歌が濱！

何人がいつこんなやさしい名をつけたゞらうか？

若し此處に想像の翅廣き小説家が、一管の筆を携へてきたり、玉のやうな、砂に座して、靜かに思ひを運らしたならば、まあどんな神秘な作が出來るだらう、その名を聞いてだに詩の影がゆらめくを、蓋し何等かの神話、傳説があるのだらう。

見給まへ、天女も浴みすべく、幾千仞の底までも透き徹つた湖の水は、男波女波のさゝやきに、人の世の知らぬ靈想を與へるであらう、千重の山、五百重の山、ろこには雲を吸ひ霧を喰つて、脚下界を踏まぬ仙者の、一言にして人生の惑ひを解くであらう。

思ひつゝ大なる絶景を見た。

左手にちかき寺が崎は咲き散る波を嚙むで居る、アメリカの旗ひらめかした端艇が、上野島へつくとみるうちに、丈高き西洋婦人が、白鳥も耻づるやうな白衣をかゝげて島へ登つて行く、湯本へ通ふ舟を見送つて、眼を正面に移すと、千手が濱のあたりに白帆の影が鮮かにみへ

る、ろの右は中宮祠で丹塗りの社殿が青葉にうつろひて賑かに、山村水郭酒旗の風、湖畔の宿屋と料理屋が滿艦飾の時は今である、恐ろしい華嚴の瀧の上流はわが右手にあたつて水は正午の夏の光を眞白に反射して居た。

こゝに於て諸君は眼前に天ろゝり立つ男体山を忘れてはならぬ、末廣がりの山の裳裾は、湖水の洗ふにまかせつゝ、既よ高原のれべるの上、頭を抽んづること八千尺、群巒遠く下に見ての雄威は、恰もひれ伏したる諸侯の前に、かの三代將軍を想起せしむるのである。

四　片

僕は今、歌が濱に艤ひして、菖蒲が濱に向ふべく棧橋の上に立つた。

同行四人、一人は湯治を目的の男、一人は商人、女はホテルへ稼ぎよ行くのだ、僕か？僕は骨を埋むへき青山を求めに行くのである。

胴の間に四人は座つた、水面を撫づる青嵐は、深山の花の香をこめて言ひ知れす快い、ぎい〳〵と寂しい艪の音、ぱた〳〵と船縁を叩く波の柔手、水は藍瓶を覗いたやうに、物すごく澄むだ湖底の、ろこには龍の宮居もあるゞといふ。

風は凪いで、日は赫々と半面に照りつける。

すつと紫の蝙蝠傘が開く、今度は菅笠が頭にのる、帆の陰に隱れた、おざを被つた、舟師は艪の手を休めて、のどかに青い煙を吐くと、恰度男体山の中腹を纏ふ白雲の上に棚引いて消ゑ失せる、ろして湖の眞中ごろに來て、舵を右に轉ずると、船体は右を向いて、最う目ざす菖蒲が濱は、指呼の間に、笑みて新來の客を迎ふるが如しである。

艪を外して帆を掛けると、男体颪吹き落ちて、舟はする〳〵と青波の上を滑して行く。

僕は船首に近く仰臥して、帽子に光を避けたが、たまたま高き波頭の、さぶりと碎くれば、雨としぶく水煙！

思ひ出たる詩ゥあなる!!

「またあきかぜに帆をあげて、うら汐の海ねてわたる、

星月夜ころおかしけれ、なにを荒ぶるあらなみぞ、をりをり船にくだけては、ほゝ黒かみをぬらしける」―の趣、時と所は異ふけれど、中禪寺湖をねてわたる、身はこの詩の境に似て、ほゝ黒髪のぬるゝも興、吾れは頻る散る水の香を、なつかしき自然に對する感謝の露かと、ふと思ひ浮へた時。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

草鞋の紐をきつと結んで、行く手のこゞしき山を見あげた。

手帳を出してみると、方等瀧、般若瀧、地獄谷、湯瀧、湯本……訪ふべく見舞ふべき勝地の無限は、果して造化の巧妙を叫ばしむるのであらうか、永く渴したる日光山の奥は、不言の詩に、わが歌袋を滿たして呉れんければならぬ。

振り返ると、舟やいづこ、いよゝ蒼然たる湖の上は、たゞ青嵐の狂へるばかり。

會報

○新入特別會員

左記の諸君は本會の主旨に贊同して本會特別會員となられたり

東京小石川區西江戸川町八番地　大井元洞
東京本郷區春木町二丁目二十九　江波知輝
東京四谷區新堀江町三番地　岩原恒三
東京芝區田村町二十一番地　安田則人
東京麴町區富士見町二丁目三十九　敷津林傑
横濱市住吉町六丁目八十四番地　得田易
宇都宮市池上町　神野勇三郎
富山縣下新川郡入善町　野島茄三郎

○特別會員陸海軍醫の動靜

二等軍醫太田長作氏一等藥劑官橋本安吉氏は東京衛戍病院附に　一等軍醫神谷貞二郎氏は歩兵第十二聯隊附に　海軍中軍醫堀井吉平氏は呉海軍工廠附に　二等軍醫增田貞吉氏は第九師團軍醫部々員附に　二等軍醫駒井定哉氏　仝藤波謙の両氏は臺南衛戍病院附に　一等軍醫橋本喜久

三氏は歩兵第四十聯隊に三等軍醫谷澤一郎水上俊三の両氏は歩兵第十聯隊附に　三等軍醫佐々木純一郎山下鋲吾の両氏は歩兵第四十聯隊附に　三等軍醫鈴木實氏は歩兵第二十聯隊附に　三等軍醫羽田公太郎氏は歩兵第三十九聯隊附に　三等軍醫福山可藏氏は騎兵第十五聯隊附に　一等軍醫松浦啓三氏は工兵第十一大隊附に　三等軍醫速水昇氏は由良砲兵聯隊附に　二等藥劑官上田英雄氏は由良衛戍病院附に　一等軍醫竹下麗三郎氏は下關衛戍病院附に　二等軍醫清水秀夫氏は工兵第九大隊附に　二等藥劑官長崎謙治氏は下關衛戍病院附に　三等軍醫松井源長氏は歩兵第三十五聯隊附に　三等軍醫英軒二氏は歩兵第三十六聯隊附に　二等軍醫小林茂樹氏は第七師團軍醫部々員附に　三等軍醫後藤義賢氏は歩兵第二十八聯隊附に　一等軍醫河村多郎氏は札幌衛戍病院附に　三等軍醫前田豐作氏は旭川衛戍病院附に　一等藥劑官石田太吉氏は旭川衛戍病院附に　三等軍醫下村義二郎氏は函館要塞砲兵大隊附に　海軍少軍醫三野賢吉氏は武藏乘込に　三等軍醫田中湖氏は歩兵第十三聯隊附に　三等軍醫溝口美代志氏は歩兵第五聯隊附に　二等軍醫關口通太郎氏は歩兵第三十一聯隊附に　二等軍醫佐伯亮齊氏は歩兵第十七聯隊附に　三等軍醫小原德太郎氏は臺灣守備歩兵第三大隊附に　三等軍醫佐野愛二氏は臺灣守備歩兵第四大隊附ゟ　二等軍醫松村魁氏は臺灣守備歩兵第四大隊附に　二等軍醫藤浪謙氏は臺灣守備歩兵第六大隊附に　三等軍醫山本幹雄氏は大阪衛戍病院附に　補せせられたり

○特別會員動靜

○堀田圭三氏　は陸軍三等軍醫として出征中の處四月一日無事鄕里に凱旋せられたり

○伊藤禮治氏　は召集解除後京都醫科大學眼科教室に勤務せらる

○井上啓治氏　は神奈川縣海港檢疫醫を拜命せらる

○龜田安太郎氏　は臺灣總督府專賣局技手兼臺灣總督府技手奉職せらる

○渡邊疆氏　は鹿江病院へ勤務の傍ら石川縣鹿島郡七尾尋常高等小學校並ニ七尾町立商業學校醫を兼務せらる

○酒井佐太郎氏　は二等軍醫として三十七八年戰役の際應召引續き金澤衛戍病院に勤務の處疾病の爲め先般退役仰付けられ歸鄕の上保養旁鄕里に於て開業せらる

○橋本喜久三氏　は一等軍醫として現役中の處病氣の爲め休職仰付けられ歸鄕金澤石坂町に於て開業せられたり

○辻本辰之助氏　は召集解除后直に鄕里鹿島郡能登部に於て開業せられたり

○眞柄佐一郎氏　は召集解除後大津赤十字社支部病院へ勤務せられたり

○片山良作氏　は金澤病院眼科に勤務の處病氣の爲め先般辭職歸郷せられたり

○猪木彦助氏　は金澤病院婦人科に勤務の處二月下旬辭職歸郷の上開業せられたるも再ひ來澤の上金澤娼妓病院醫員兼娼妓檢査醫を拜命せられたり

○田中一次郎氏　は召集解除後金澤病院外科一部へ勤務せらる

○沖野彌一郎氏　は多年金澤病院外科一部に勤務の處先般辭職の上金澤市長町二番丁に於て開業せられたり

○英軒二、松井源長の兩氏　は三月八日附を以て三等軍醫に任せられたり

○林百樹、林豊丈の兩氏　は先般金澤市五寶町六番地に開業せられたり

○熊西中藏氏　は金澤病院眼科醫員を囑托せられたり

○佐崎伊久氏　は金澤病院外科醫員を拜命せられたり

○笠雋吉郎氏　は石川縣金澤娼妓病院醫員兼娼妓檢査醫を拜命せられたり

○山田義忠氏　は北海道第部郡立病院長に聘せられ去る三月初旬赴任せられたり

○赤土佐一氏　は石川縣衛生技術員を拜命せられたり

○深見貞之助氏　は石川縣金澤病院外科に勤務せられたり

○辻一次氏　は石川縣金澤娼妓病院醫員兼娼妓檢査醫を拜命せられたり

○石黑均造氏　は仁壽生命保險會社醫として名古屋支店に勤務せらる

○杉山政長氏　は東洋内科醫院分院に勤務せらる

○甘利昇氏　は郷里長野縣北佐久郡中佐都村に於て開業せられたり

○東良平氏　は召集解除後富山縣高岡市に於て開業せられたり

○岡田甚美氏　は近江國愛知川成宮醫院に勤務せられたり

○北川健三氏　は去る十五日より長町川岸に於て開業せられたり

○本濃觀三氏　は先頃より馬場一番丁に於て開業せられたり

○上原秀三氏　は金澤病院内科に勤務の處先般辭職の上富山縣西礪波郡福光町に於て開業せられたり

○森田齊次氏　は東京牛込矢來町三番地中ノ丸七四號へ轉居せられたり

○寒稽古記事

戰捷の新年は偉大なる榮譽と雄大なる希望を以て我日東帝國に來れり、第二の國家を形成すべき吾人青年の責務また大ならずや、吾人國家の期待に應へむは只健全なる体軀健全なる頭腦を保たむのみ、心身の練磨只之に供へんのみ、我校例によつて一月十三日より二月十一日に到る一月餘の寒稽古、酷寒烈風何ぞいとふに足らん、燈火影くらき午后六時より約三十分間餘滿身汗を揮つてたゝかふ雄姿、たれか雄渾壯絶となさむや。

◎柔道部

左に寒稽古皆勤の勇士を列せん

丹羽玄純　今村文碩　桑原益方　平松敏四郎
太田勘市　林秀雄　岡田秀造　加藤健之助
加藤錠吉　酒井碩治　小林進　佐藤郷次郎
吉川友信　小西孝德　佐竹秀一　關戸辰次郎
近藤時男　江村研正　梶原廣　大井藤次郎
石川玄知　田中精一　天野彦次　敷田雄登記
坪田本照　高儀京治　高澤冠一　佐々木茂樹
須賀芳篤　森善次　重松盛勝

大會の摸樣

三旬の寒稽古を終へ意氣衝天の氣あり、ひそかに其武を試むるの期なきに苦む。時は來れり二月十八日、柔道大會の報に接するや、豫て鍛ひし鉄腕鉄脚、敵打取りて天晴の功名我こそ得んと時を後れず走せ寄る若武者は何れ劣らぬ勇士の面々、其の面搆の雄々しさは開戰以前已に敵を呑むの慨あり、我校此の勇士に由りて振武せるこそ頼母しけれ。

午前十時を報するや、高安會長下平級長松田先生を初めとして數百の群集座につきて開戰の期を俟つ、青木先生審判の位置に立たるゝや一本勝負は關戸田中の両士に由て始めらる、互に秘術を尽して戰ふこと十數戰、終に勝負を決せずして陣頭を退けり、夫より勇士入り乱れ双々奮鬪し、或は投るあり抑込むあり、手負に屈せず大敵に當て討死せるあり、花をもあざむく若武者が白糸縅よ身を固め大身毛脛の剛敵に打勝つあり、千態万狀何れも劣らず見ねにけり、名ある剛敵打取りて感狀を得たる勇士の芳名左の如し

○○　敷田雄登記　○○　須賀芳篤　○○○　折原廣
○○　桑原益方　○○　城谷隣賢

三本勝負勝負表

○○（中川善松　金子義長）　○○（高澤冠一　敷田雄登記）　○○（加藤錠吉　關戸辰次郎）
○○（田中精一　丹羽玄純）　○○（矢原準一　高儀京治）　○（天野彦治　今村文碩）

○○（小高利四郎　森善次）　○（須賀芳篤　鈴木琢磨）　○（大井藤次郎　重松盛勝）

○（小林進　坪田本照）　×（林秀雄　佐々木茂樹）　○（岡田秀造　角田耕六）

○○（高保二　太田勘市）　○○（佐藤鄉次郎　高橋義之）　×（酒井禎治　近藤時男）

○○（江村研正　加藤健之介）　×（桑原益方　淵原隆庵）

○寒稽古皆勤証書及進級証書授與式

當日進級の榮を得たる勇士の面々左の如し

吉田宗一　吉川友信

右一級に昇進せしむ（爾後稽古の際黑帶を用ふる事）

福田四郎　高井魯一　佐竹秀一

右二級に昇進せしむ（爾後稽古の際茶褐色帶を用ふる事）

城谷隣賢　小西孝德

右三級に昇進せしむ（爾後稽古の際茶褐色帶を用ふる事）

淵原隆庵　近藤琢磨　桑原益方

平松敏四郎　折原廣

右四級に昇進せしむ（爾後稽古の際茶褐色帶を用ふる事）

講道館勝負法之形　（吉田宗一　吉川友信）

天神眞揚流初段立合形　（高橋義之　折原廣）

○（二中浦田類德　近藤琢磨）　×（一中田宮某　二中藤田研二）　○（四高森岡二朗　平松敏四郎）

○（一中不破富男　二中角永敬次）　○○（一中齊田寅彦　二中辰巳孝一郎）　×○（一中城戸口有彦　折原廣）

○○（二中金田仁三郎　石川玄知）

講道館投之形　（吉川友信　高井魯一）

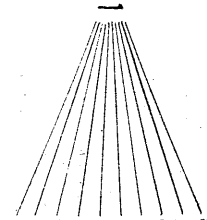
講道館五ッノ形　（福田四郎　吉田宗一）

×（四高竹田鉾次郎　瀧澤武藏）　×（一中村政吉　二中近岡源三）　×○（四高小西孝德　若井孝太郎）

○（一中齊田十二　城谷隣賢）　○（四高自上祐吉　小出貞次郎）　○（四高水村法惠　佐竹秀一）

番外十人掛

○○○○○○
○○○○○○　吉田宗一



吉田氏の猛烈なる事修羅王の荒れ出でたる如し時を費す事廿二分にて月桂冠を得たりしは感服の外なし。

午後五時三十分大會終る、高安會長下平部長の御出席を謝し、松田先生が特に寒稽古以來の御尽力を多とす。

附記　吉田宗一君昨年大日本武德會に出席し撰拔勝負に二等賞を得たり我か柔道部の名譽となす

併て本年一月講道館初段を得らる

◎劍道部

花は櫻木人は武士、げに封建の代より武士と櫻は國の粹なりけむ、今梅の花散らんとして櫻桃の蕾ふくらまんとする日、我が十全會劍道部大會は開かれぬ、演武場は例によりて濟々堂を以て之にあて、國下先生審判の下に試合は始まる、時に午前十時三十分。

今左に當日の番組と其成蹟を擧げん

三本勝負

○○(坪田本照 相馬甲五郎)
○○(藤塚政吉 角田耕三)
○○(林秀雄 久我龜)
○○(吉野新八 村山貞二)
銃○○(若林古福 加藤(小使))
×○(須賀芳篤 折原廣)
○○(近藤時男 天野彦治)
○○(福田四郎 高儀京治)
○○(小林唯四郎 佐々木靜)
○○(田中信一 山田茂樹)
○○(金子義長 久我龜)
○○(若林古福 久高唯秀)
○○(吉浦精 七五三龜吉)
○○(名取傳二 恭善次)
○○(佐々木靜 白井濟)

水野一傳流形

○○(農才記省三 本仙太郎)
×○(一中高間規一 高澤冠一)
○○(四中中村武次郎 敷田雄登記)
○○(商金子英一 今井外吉)
銃○○(卅五酒井彌三郎 松村作次)
○○(卅五福田松次郎 赤尾肇三)
○○(師村井又三郎 澤田辰造)
○○(一中奥泉嘉一郎 曾田米三郎)
○○(卅五福田松次郎 吉田宗一)

廣瀨先生 石橋三也

○○(二中松本亮正 岡田秀造)
○○(二中西久和 才田猶次)
×○(四中橋本 岡田秀造)
○○(二中橋本安三 赤尾肇三)
銃○○(卅五酒井彌三郎 村山政次)
○○(二中大久保銅造 長田八三郎)
○○(四高渡邊八郎 石橋三也)
○○(監四ッ谷喜太郎 田中三彌)
○○(警前田喜久太郎 長田八三郎)
○○(一中舘昌次 本仙太郎)
○○(四中吉岡清兼 敷田雄登記)
○○(卅五加藤 吉田宗一)
銃○○(卅五酒井彌三郎 才田猶次)
○○(師紺井彌三郎 田中三彌)
○○(四高谷中晩太郎 才田猶次)
○○(四高赤松祐之 赤尾肇三)
×○(四中東出鉄 澤村恒次)
○○(外卅五酒井彌三郎 高橋)
○○(一中泊武治 高澤冠一)
○○(卅五土井繁次 才田猶次)
○○(商福島勇次郎 矢原雄一)
○○(四高高木清彦 齊藤銀一郎)
×○(伊藤文吾 矢原準一)

神刀無念流形

○○(警宮本義之助 石橋三也)

都賀田先生 國下先生

廻り勝負

一等賞八人落シ 白鞘短刀授與 四中 吉岡清兼
二等賞七人落シ 曾田米三郎
六人落シ 四高 關谷啓一
六人落シ 石橋三也

備考

卅五ハ歩兵第卅五聯隊
監ハ監獄署
師ハ師範學校
二中ハ第二中學校
農ハ農學校
警ハ警察署
四高ハ第四高等學校
一中ハ第一中學校
四中ハ小松中學校
商ハ商業學校

○寒稽古皆勤者と進級者

寒稽古皆勤者

久我　龜　佐々木　靜　山田　茂樹
岡田　秀造　長田八三郎　赤尾　肇三
田中　三彌　今井　外吉　須賀　芳篤
藤塚　政吉　安藤　佐吉　大野　幸重
田中　信一　高澤　冠一　敷田　雄登記
吉浦　精　坪田　本照　本仙　太郎
森　善次

進級者

二級　石橋　三也　田中　三彌　矢原　準一
田中　義雄
三級　赤尾　肇三　長田八三郎
四級　岡田　秀造　今井　外吉　敷田雄登記
高澤　冠一　久我　龜　齊藤銀一郎
森　善次　井上松三郎　澤村　恒松
五級　佐々木　靜　山田　茂樹　藤塚　政吉
大野　幸重　安藤　佐吉　田中　信一
坪田　本照　高儀　京次　吉浦　精

○第卅六回十全會講和例會兼第九師團凱旋衛生部員招待會記事

「云ふ勿れ干戈を以て敵に見へたる吾將卒の勳功のみを」と云へば如何にも珍昏漢に聞ゆるか否かは知らぬが、實際其通りで皇師一度出征するや其向ふ處常に連戰連勝を得しめたる處のものは、蓋し吾が幾十萬の忠勇なる精神をして常に健康に常に活潑に行動せしめたる原動力、換言すれば吾が軍醫諸君の熱心なる働に依つて、其軍陣に最も恐る可き敵てふ種々の疾病をコトゴ〳〵く未發に撲滅し、以て吾が將卒をして安全に人道の敵と戰はしめたる結果に他ないのであると云ふ事は誰一人も否定せぬ處であろ！。吾が十全會に於てゝ既に此光榮ある凱旋衛生部員諸君の勞を聊か醫す可く一夕盛大なる歡迎會を開催したのは、實に偶然の出來事では無いのである、緒論は先づ此邊で止にして扨愈々當日の記事を簡單に書き連ねて見れば、

二月六日。本會講和例會に兼ての歡迎會と云ふ意味で以て、各招待狀には午后正五時開會と記されてあつた爲め、篠突く大雨（ちと大袈裟だが）で來賓の有無如何と氣づかつたにも關らす、熱心なる五百餘の會員諸君と卅五名の賓客は定刻前既に會場濟々堂に充滿したのである。

午后五時二十分開會の鈴は勇ましく鳴り響いた、主客一同に起立、謹んで『君が代』の三唱あり、高安會長拍手の中に悠々登壇開會の辭を述べられ、續いて上田講話部長登壇第三十六回講話會例會開會の辭を述べ、此處に暫し熱心なる出演者諸君の快辯は縱横に振り舞はされた。

第一席　自殺論　折原廣君

君は自殺無害論を主張して下壇。

第二席　先天性心臟病患者供覽　齊藤傳平君

稀有なる本病患者が既往症及び現症の一般を讀み上げられただけで規定の十分間は過去り、單に患者の供覽だけで未だ充分の說明を聽かれなかたの如何にも殘念であつた。

第三席　上海外留學辭　敷波敎授

氏は明治廿七年の本校卒業生であつて目下仙臺醫學專門學校敎授である、今回解剖學研究の爲め獨國に留學を拜命せられ、機會を以て我が金澤に歸省せられしもので本日此會に列席せらるゝの好機を得られたので、氏は上田部長の招介に依り、吾々會員に向つて簡單なる一片の謝辭を述べられ壇を下られたが、何か學術上の話でも聞かれると思つて居つた吾々は多少力拔けの感があつた。

第四席　旅順開城當時に於ける露國の衛生に就て　陸軍三等軍醫正　野口栓太郎君

君は極めて快活なる軍人的口調を以て、慨切に彼の旅順開城當時に於ける彼國衛生部の慘憺たる光景を述べられ加ふるに十數葉の寫眞を以て其視察談の欽を補はれ、懇篤叮嚀實ゑ至らざるなし。

第五席　背髓硬膜外注射に就て　中島誠君

君が實驗談四例を報告せられ何れも佳良の結果を見たりとて局を結ばれた。

尙出演せらるゝ筈の辯士も多くあつたが、如何せん講話部の時間は既に過去つて早く閉會せよとの茶話會部長よりの注進、何うも今日は茶話會が本旨の事なれば先づ先づ致し方も之れ無く、他の諸君には次會に出演を乞ふ事として、部長は此に閉會の辭を述べられた。

是より愈々歡迎會の開會！

小川茶話會部長、微笑せられつゝ登壇、先生獨得の妙ある圓轉滑脫の辯を以て茶話會開會の主意を述べられ、劈頭先づ主客の顎を解かしめ、次て祝歌朗詠あり。引續ひて本會の通常會員で先に近衛陸軍中尉として滿州の野に轉戰せられたる七五三君（今日は特にお客分の）來賓總代として一場の挨拶あり、之か終れば愈々餘興は始まる。

吟詩（本間君）君が得意の美聲を以て滿堂の騷鳴を一時に靜められたるはれ手柄なり。

琵琶（山岡氏）是はこれ、本日の餘興にと本會が特に

兼々より當地に來遊中の同氏を煩はしたものであつて壯烈無比の旅順口閉塞隊、悲哀無双の北白川宮臺灣入の二曲。蓋し歌は先生齒の拔けて居つた爲め時々息の漏れるので餘り深くは感心も出來なんだ、けれ共其巧に四弦を彈ぜらるゝ處は遺に先生と感嘆せしめたのである。

尺八（中谷君新谷君合奏）拍手喝采の中に其の曲を奏し終へられた。

琵琶歌（守部君）君が壇上に現はるゝや拍手喝采暫しは鳴りも止まらなかつた程である、靜かに眼をつぶつて開口一番「御吉野の……」と語り出づる歌は君が得意の吉野落初段、音吐麗朗、聽者只恍惚として醉へるが如く、其終りたるを知らなかつたものやろも幾人。

尺八（小村氏谷道君合奏）「難波」の一曲。吹奏者は斯道の師範家小村氏併に本校三年級に其人ありと知られたる谷道君、吾は不幸にして尺八なるものに疎ければ充分なる事はわからぬけれ共聽神經は只々ムヤミに面白く興奮し、れ蔭でグット命が延た樣な感がした。

尺八（小村氏）之れ亦面白う拜聽した。

茶菓を順次に分配して一先休憩。元來お菓子を嚙つてれ茶を飲んで面白い餘興を見る……そして其面白い餘興の數々が所謂ロハと來て居るから誰の顏を見ても皆圓滿太平なので……。

狂言朝比奈（中村君田中君）何分言葉が滑稽である爲め、演者の欠点を補ひ得て捧腹絕倒せしめたることも度々。其妙技神に入るとゝ云ひ兼ぬるも先づ〳〵成効の分である、感服々々。

尺八（高桑君石川君合奏）流石は四年級に於て斯道の名家と人にも知られたる二氏の妙技、其追分の一曲は心なき吾等にまでアット感嘆せしめたのである。

明笛（服部君寺田君）曉々たる竹紙の音滿堂にすみ渡り、吹去り吹來つて恨むか如く訴ふるか如く、不覺聽者をして喝采を叫ばしめた。

劒舞　兒島高德（奥田君）

仝　怒髮衝天（關根君）

仝　西鄕隆盛（林　君）

仝　捨　子（井上君）

各獨得の舞振りを以て、極めて勇壯に極めて活潑に又極めて悲壯に演ぜられたが、技は何れも眞にせまりて觀客常に感嘆した。

琵琶歌（守部君）先に吉野落初段で限りなき喝采の中に下壇せられたる氏は再び拍手を以て迎へられた、歌は先の續吉野落二段、いつもながら君の美音には感服の他なく、村上義光の壯烈なる最后の處などは眞に其英姿を眼前に見るが如く感慨の至に堪ねなかつた。

ハーモニカ（高儀君）壯快なるマーチの樂譜、余輩身心浮々として骨鳴り肉躍り心魂遠く飛んで天外に行く、君が吹終つて飛鳥の如く壇を飛下るや衆忽然として夢の醒たるが如く氣の付いた樣に俄に喝采したのは實に滑稽であつた

手品（本校小使）壇に立つていかにもシサイらしくすまし込んで四方の觀客をグルリと見廻すなど先生中々の味をやり扱通り一片の口上も頗るウマク愈々奇術にかかつて見れば是は亦案外の黑人愈々之では小使殿明日より手品師となつては如何で御座るとは少々惡口である。

手風琴明笛合奏（高野君小黑君林君）充分に合はなかつたのは甚だ遺憾であつた。

謠曲鉢の木（上田、宮田、石川、各教授）滿堂崩る計りの拍手の中に三先生悠然と着座せらる、小川茶話會部長口上乍恐……を擔當、扨愈々上田先生のシテ宮田石川兩先生の地謠にて「さて鎌倉の諸軍勢……」と謠ひ出で給ふや滿堂の騷擾一時に靜り「歸るそ嬉しかりけり〳〵」と謠ひれさめらるるに至て再び湧くが如き拍手喝采爲に耳も聾せん計りである、蓋し三先生がかくの如く張り込まれたるは學校開闢以來初めての出來榮であつたろー、吾等は多大の謝辭を表せねばならぬ。

餘興の數々、歌ひ盡し舞ひ盡して既に亥の刻となつた、小川部長登壇して閉會の辭を述べられ、次で高安會長の音頭にて主客一同起立、滿腔の熱誠を以て十全會萬歲を三唱し、目出度散會はしたものゝ雨は尙降り止まず、外は寒風荒れに荒れて、內は春風春水一時に來るといふ趣致であつた。

當日來賓として出席せられたる人々は

中川二等軍醫正。野口、鶴見、岩田、小林の各三等軍醫正。藤井、原田、國分、增田の各一等軍醫。高畠一等藥劑官。駒井、辰巳、東、松田、羽根田、諸角、增田の各二等軍醫。江藤、山下、水上、谷澤、大沼、中山、河本、鈴木、眞柄、佐々木、池田、佐野、朝倉、羽田、小島の各三等軍醫。新三等藥劑官。伏田、窪美、長谷の各見習醫官他に仙臺醫學專門學校教授敷波重治郎氏併に本校學生七五三龜吉、風間文一の兩君。

因に記す、本日小川部長が席上に於て讀まれたる祝歌を擧ぐれば

歌かぬたか吾知らね共さゝげなん手前作りの三十一文字

梓弓春まだ淺き越路潟波たゝぬ世となりにける哉

（かゝり）

○四年級々會兼七五三中尉歡迎會

二月二日午後正五時金谷館に於て開催、井上元氏の開會の辭に次で下平級長の級會に對する希望演說あり、卓を繞して立食する百十二名の面相一々書かんも心苦しければわざと略しつ。

出席せられし教授は下平級長を始め小川、村上、金子、上田、宮田、松浦の諸先生及小原講師等なりき。

五分間演說者は七三五近衛中尉の實戰談を始め丹羽直、丹羽玄純、屋富祖德次郎、戸井源吉の諸氏。

餘興には上田教授の蓄音器、石橋氏の滑稽二〇加、田中氏の狂言、石橋、原両氏の曾我、井上氏の琵琶、右川高桑両氏の尺八、井本氏の淨瑠璃沿革史及び山岡琵琶法師の琵琶、盲人某氏の彈琴等。最後に村上、上田、宮田、松浦諸教授及全好學生諸氏の謠曲あるべき筈なりしも謠ふが如く謠はざるが如く終に余も書くが如く書かざるが如く筆を擱き、四年級最終の級會として又本校摸範的學生會合として苟も耻づべきなき高潔なりしは向山の雪にも比すべくや。

茲に發起人の姓名を記してその勞を多謝す。次第不順）

杉原左武郎、石橋三也、井本清吉、林龍門、松山清、井上元、土屋米二の諸君

○第二年級第二次級會

發展！發展！と何でも蚊でも發展と、丁度蛙の鳴くが如く、密蜂の飛ぶが樣に、喧しく一之も戰捷の副產物—我級會も、其數には洩れず、丙午新年の劈頭に於て如何に發展の實を揚げたるか、級會及新年宴會、今一は、もと我級友たりし凱旋三勇士の慰勞會とを兼ねての盛會!!

屠蘇の醉も、うすらいだ一月二十九日、窓外の積雪は、皚々たる山野を連想せしめ、太陽は僅かに彼が金線の征矢をなげて居るとはいへ、時に西比利亞からでも來た樣な烈風が頰を撫で去る寒さ、こゝ金谷館階下の一室、之が本日の會場、正服和服思ひ思ひの服裝、ストーブを圍み、椅子に凭れての談笑、旋て開會のベルが鳴ると共に一同着席、後、級長上田先生を初めとして山崎小川松浦湯目小原の諸先生着席、暫らくは草履の音、椅子の響、其れの靜つた頃は既に演壇に立たれたる酒井君が反射せる眼鏡の、晃々と滿場に向つて注がれてゐた。莊重なる風姿、流暢なる快辯、一種勇健の調を帶びて述べられたる開會の辭、例によつて例の如く、痒き所に手のとゝくが如きもの實に恐縮の至りなり。

上田先生。余興の數も多き事ゆへ、長くは曰ひませぬが、たゞ今度の級會に於て特に會場を本館に定めし事に

つき誤解なからむ樣にと述べ給へる事は「諸君の二年級は、實に、四學年を通じて、最困難なる學年にてことゝ本學期は、生理の學年試驗もある事故、隨分腦をいためらるゝ事でしよう、此試驗を首尾能く超ゆるには、大ゝ遊び大に勉勵する事肝要なり、愉快を極むるには本校濟々堂では多少狹き感あり、且つ當今は柔劍の寒稽古もある事ゆへ本館に定めし所以なり、諸君能く我意を汲みて大に愉快に半日の歡を尽されむ事を」と、恰も乳房をとつて授けらるゝ樣な御言葉、實に感佩の至りなり。

伊藤哲一君。英語演說「一錢の猫」。

一錢の猫を以て巨萬の富を致せし成功談、大に靜聽すべきものであつた。

小野澤在桂君。日露の干戈相見ゆるや、君は召に應じて遠く滿州の原頭、劍擊の間に處すること數閱月、今や至大の榮譽を負ふて本校に歸らる、君体軀肥滿、從容語りたまへる戰爭實歷談及び陣中一班、光景眼前に迫るが如く、吾人をして徐ろに追想の糸を辿らすしめたのである、殊に行軍中の滑稽談の如きに到りては、恐らく仁王も噴き出さん許り。

澤田壽三君。須駕芳篤君。共に目出度凱旋せる勇士、交々たつて一場の挨拶を述べられた。

＊　＊　＊　＊　＊

余興

尺八合奏。新谷君、中谷內君。追分。

僧に扮し現れ出でたる斯道の妙手、嘹々響き渡る折ふし、滿場肅寂、些の聲を發するなく、心神爲に靈化せんとせり。

琵琶歌。大西君。國船。

或は高く或は低く登りて万丈の高峯に達し、降りては、千仞の深谷に到る、其妙節にふれては、惰夫をして起たしむべく、怯者をして進ましむべし。

關根君の劍舞。吉澤君吟詩。

「しき島の大和心を人若し問はゞ朝日に匂ふ山櫻花」と吟じ終れば倏忽現れ出でたる壯者、襷十字にあやどり、蒼龍を撫して立つたる英姿凜々、「鞭聲蕭々……」と吟ずる刹那、舞者飛蝶の如く舞ふて劍に聲あり、一吟一動、端然として乱るゝなく、悲壯交々いたりて思はず嘆聲を洩しぬ。

軈て晩餐は運ばれ、三十分間の休憩後又も續いて余興は始まる。

西君の琵琶歌。「臺灣入」。

雄渾悲壯極りなき節々、音吐朗々一入の感興を添へたり。

明笛合奏。寺田君、服部君。

淙々たる溪水の如く、蕭々たる春雨の如く、ろが幽玄た

る調は實に床しきものなりけり。

謠曲。鷹津君。俊寛（觀世流）。

「人は見かけによらぬもの」と、謠ひ出づ、遺に人は見掛けによらぬものなり、感珍至極。

山崎一味齊氏の講談。筑紫市兵衛實傳の一節。

變現極りなく、波瀾縱横に卷いて應接に遑あらざるもの、さすがは御商賣なり、呵々。

奏樂の音と共に現れ出でたる、舞踏の數組、馬のはね飛ぶが如く、滿場ドッと笑聲を揚げたり、能く笑はせたるもの哉。

琴。中川君。六段及春雨。

琴を斜に扣へたる時の衆感はたして如何「あの男が……」と口にこそ云はね、顏にころ現はさね、心中私に咳きしならむ。爪絃線に觸るゝと見るや銀鈴の天外より洩るゝが如く、溫雅なる其響、崇高なる其調、只恍惚として云ふ所を知らざる也

琵琶。守部君。　劍舞。關根君合演。

中々面白かりき。

狂言「茶番病院」「千代萩」等吾人をして頤をとかしめんとせしは遺がの御手なみ、敬服の至りなり。

其他蓄音機等數種あり、吾人爲に倦惰にいとまあらざりき。

かくて終日の歡をつくし、欣然星を仰いで歸路につきしは、正に十二時を過ぐる頃なりき。

○第七回北陸聯合醫學會

空は麗かにして野山は淸く、櫻花爛熳たる四月十七日、第七回北陸聯合醫學會は本校濟々堂に於て開かれぬ。本會は例によりて盛大、斯道研鑽の名家が各其の實驗と學理とを對照して講せらるゝものなれば、一として有益ならざるなく、吾人の參考に供せらるゝもの甚だ多し。殊に今回は戰勝後第一次の開會なれば、先頃來凱旋せられたる陸軍側の會員諸君が戰地の病院に於ける實況報告も多からんことゝて、馳せ參れる聽衆は學生を算して無慮六百名余、さしもに廣き會場も立錐の地さへ餘さぬ程に見ひたりける。午前八時の號鐘と共に高安會長登壇せられ、徐ろに拍手の裡に開會の辭を終らるゝや、左記三十余名の辯士は踵も絕たで演ぜられぬ。（演說十分間、討論五分間、時間厲行）

惜いかな時間の不足を告げしため、花の如き辯士をして徒らに蕾の裡に葬り畢んぬ。

開會の辭　　高安會長

祝電朗讀　　松浦會場部長

外直筋及上斜筋麻痺ノ一例附麻痺筋ノ　加藤慶三君
按摩法ニ就テ　輕部修一君
所謂 Hikan ノ實驗　水野桃太郎君
醫師法實施后醫會組織上ノ意見　窪見昌保君
藏經醫觀　品川碩君
戰勝國ノ醫師　其二　瓜生保之君
臟器療法（第三回）　高澤敬作君
化學ニ魁セラルヽ勿レ　石川喜直君
左椎骨動脈異常　上田計二君
腸チブスノ持續性湯治ノ効果如何　井戸時也君
眼瞼病　大月豐君
丹毒ノ治療法　山田謙治君
醫師法通過ニ就テ　三股梅吉君
アクチノミコーゼノ標本供覽　波々伯部重政君
胃液採取ニ就テ　松浦龜太郎君 岩砂鈴次郎君
姿勢不定症（アテトーゼ）附患者供覽　土肥慶藏君
黴毒ノ原因的療法　富士川游君
治療學ノ進歩　山崎幹君
光線療法　辰己禮造君
外傷性「ノイローゼ」ノ數例　小原芳雄君
糖尿病ニ於ケル膵臟內「ランケルハンス」氏島ノ病理（標本供覽）　金子治郎君
細胞ノ被適分化　小川勝陳君
北陸婦人ノ月經初潮年齡ニ就テ　八田智証君
巨大ナル子宮粘液筋腫ノ說明（標本供覽）　八田智証君
白点狀網膜炎ノ實例　二　高安右人君
胸部ノ皮下ニ生セル淋巴管腫「デモンストラチョン」　草野佐一郎君
外傷性前脛骨動脈瘤ノ一例　柏村謙助君
椎骨動脈瘤患者ノ「デモンストラチョン」　岩田一君
「ウロトロピン」ノ作用　島田吉三郎君
直腸膣瘻症ノ一例　鹿江佐六君
腦皮質中樞及失語症　藤井亥之吉君
閉會ノ辭　松浦會場部長

○第三回釋尊降誕會　本校學生及び第四高等學校生徒有志の一部が發起にかゝる全會は、五月六日午后一時より市會議事堂ゑ於て開かる、會する者約八百名、殆んど立錐の地も余さゞるに至れり。文學博士村上專精外二氏の有益なる講話ありて茶話會に移り、余興數番、各十二分の歡を盡して散會したるは、夕陽將に西山に春かんとする頃なりき。

○豫　四月二十九日第四高等學校に第十回端艇競漕會あり、來賓競漕に宮田先生吉田宗一君賞牌を得らる。尙撰手として左記の諸氏出漕し、全じく賞牌を得たり。

舵手　西　宇忠太　整調　吉川友信　五番　金子義長
四番　近藤時男　三番　中川善松　二番　山本直枝
一番　宮城篤珍

＊　＊　＊　＊　＊
＊　＊　＊　＊　＊

通信

○佐々木教授第三信（ストラスブルグ發宮田教授宛）

其後は申譯なき御無沙汰に及んだ蓋し主なる源因は余暇がないのだ。けれども一つゝ十全會雜誌の着するを待て居た。處が昨年一二月發行のものゞ一度着した切り來ない。十月末に「ミュンヘン」よ落ち付た飯森君から送てもらつて六月發行のものを十一月に始て見た。引き續き六月及十二月發行のものか着た。加之宮田部長から催促を受けた

昨年十月末伯林を引上げ此「ストラスブルグ」に轉學することとなつた。其後は一層多忙だ。申譯の第二ヶ條として日常の生活を書て見るのも無益でなかろう。朝は八時に燈を点して起き午後二時迄教室て仕事をして居る。二時乃至四時が晝食と往復の時間だ此往復は電車て一時間だ。又午後は四時から八時迄再び教室に入り、歸宿夜食を終るのは九時乃至十時だ。凡て仕事場にゝ腰掛の供付けがない。だから以上午前八時乃至午後八時は晝食時と電車内の外は立ち續けだ。だから夜食を終れば全身がつかりして何事をする勇氣もない。けれども其日の必要なる調査及び記錄ゝ怠ることは出來ない。日曜は持病の朝寢で午前十一時迄寢る。是れが一番の樂みだ。以て前週内の疲勞を快復せしめねばならない。斯くいふと非常に勉强の樣だが或ゝ仕事の都合上止むを得ないこともあるけれども凡て教室で仕事をして居るものは何れも此通りだ。日本人は惰弱だなどゝ云はれてゝ「シャク」に障るから痩我慢でやつてをるが實際は苦しい。彼等赤髯は生來斯の如き生活法に慣れて居るから苦もなかろうけれども生活法の全く異て居る日本人にゝ十二時間の立ち續けはたまらない。其外終日の談話應答の外國語の爲めに腦力を費すことも少くない。だから留學する人は体力、腦力が余程强壯でなければ甘い汁を吸ふことは出來ない。けれども僕の樣な虛弱な者が持ちこたへて居るのが不審議だ、

否長くは續かない、こんな無謀な生活法は來月一杯で御免を蒙る積りだから安心して呉れ玉へ、先づ余計な申譯い是れ位て切り上げて、さて

此「ストラスブルク」といふ市は獨逸の第三流位に位し伯林より西南に方り両者の距離は急行列車で十二時間だが速力が早いから日本の北海道と九州の距離に等しい、市の廣さは伯林の十分一、人口は十五萬といふが金澤よりも廣い。市内の交通には電車が引かれてあるけれども網の如くは行かない、其速力は急ならずして追ひ掛くれば停車場で待て居る。又滿員の札を見たことがない。以て住民の數を推測することが出來る。從て市内の雜沓は伯林の五分一にも及ばない。先つ日本の名古屋位だろう乎。市街は自ら新舊に二分せられ舊市街にハ諸商店ありて繁榮し新市街は閑靜にして金澤位だ。蓋し此地は彼の有名なる普佛戰爭で占領した「エルザス、ロートリンギン」の都で獨逸の西南端乃ち獨佛境界に位して居る。だから一朝平和ゞ破るれば陸戰の第一着は此地方で始るのだ。昨年「モロッコ」事件の際も市民が騒いだことがあるそうだ。今年も此一月廿日以外の「モロッコ」會議で愈々開戰する樣な噂があつたけれども未だ沙汰がない。戰爭は東洋の占有物でないから此度は歐洲で一戰始めてもらいたい。其虚に乘じて日本も仕事をするがよかろう。けれども赤髯は中々「コスイ」から虚勢斗りで中々始めない

市の道路は「アスバルト」で少い。多くハ石敷だ、從て雨後の道路は宜敷くない、勿論人道と車道は何れの市でも區別せられてある、新市街の一端「オランゼリー」と云ふ一公園がある。内に音樂堂あり「ビール」店あり平日は寂寞たれども日曜は雜沓する、其廣さハ兼六公園より稍大いが設備は簡單で一私人の庭園の樣だ。當市の有名なるものは「ミコンステル」といふ塔だ。高さ百間斗りで六七百年前の建築だそうな、其内部に見るべきものがあるそうだが未だ行て見ない、又歴史も長い樣だから書くことゝ止めて置く。其他民家の構造殊に家根の形が一見して伯林と異り舊式にして諸所に數百年前の一種固有の建物が珍重されて居る、殊に當地で目立つのは佛語を話すものゝ多きと「エルザス」洲女の「バショウ」葉の樣に開いた大きな帽子だ

氣候は伯林より南方なる丈け暖かで未だ髯の氷結したことハない。雪は一月二十六日に始て一寸斗り積た、天候も昨年の伯林に於けるが如く陰氣ならず雨降り少し。日も左程短いとは思はない。目下一月末で朝は七時に明け夜は六時に暮れる。けれども室内に光線の入ることが少いから一時間前に燈火を点ぜねばならない。(昨年伯林に於ける冬と夏の差は非常で冬日の点燈午後四時に對し夏

日は九時だ、夜明は冬の七八時に對し午前の三時位だろう）今年は氣候が一般に宜しいと見て飯森君の手紙にも「ミュンヘン」は金澤よりも余程爽快だと云て來た、當地も同樣だけれども僕は矢張り日本黨。天候以外に夥多の欠点がある

大學の建物は矢張り本部と醫學部が分れて居り甲は新市街に、乙は舊市街に在る。本部の內容は知らないけれども外見は伯林のものより宜しい。醫科教室は一箇所に集て居り伯林の樣に散在して居らない（伯林でゝ大學病院以外に市立病院が五六ヶ所あり各臨床科以外ゝ病理、黴菌等の部長を有し多くは大學教授の肩書を有し一派を立てゝ各得意の講義をやつて居る、其外開業醫で大學教授の肩書を得て講義をやつて居るものも少くない。だから例へば內科教授といふても何十人あるか知れない其內眞の大學教授よりも有名なるものが少くない。例之ば「オツペンハイム」の如き「コッホ」の如きものなり此地でゝ大學以外に講義する處とない樣だ。此の大學で有名の教授は「レックリングハウゼン」（病理）「シュミーデベルヒ」（藥物）「ホーフマイステル」（醫化學）「クレール」（內科）等の如きものだろう教室の設備は皆伯林大學よりも余程落ちる、從て月謝も廉だ。伯林で四十「マルク」のものは三十「マルク」だ。けれども經費が少いと見て研究費は盡く自辨だ。殊に醫化學の如きは一ヶ月に二百「マルク」の藥品代を拂た人がある。此研究費が乃ち醫科留學生が常に頭痛とする所だ。其他此地の物價は伯林と大差がない。蓋し巴里に接近する故ならん乎、實際巴里の品物も余程混して居る樣だ。こんな風だから田舍に居ても必ずしも經濟だとは云へない。僕も一つは經濟主義で來て見たけれども豫定に反した。だから何事もやつて見なければ分らない。費用が伯林と大差なければ凡ての点に便利なる伯林で研究する方が非常な利益だ

下宿は舊市街ノ醫科大學周圍のものは皆不潔にして「ワンチエ」（虱糞）多く學生ゝ皆新市街に住居す。僕の下宿も矢張り新市街中に在り、大學との巨離大凡半里電車にて往復す。これは厄介なれども其他は伯林の下宿よりも都合が宜しい。乃ち僕の下宿屋は三階造りの一小屋を占領して居る。こんなことは伯林ではとても出來ない。室內ゝ電燈を以て照らされ暖爐は此家占有の蒸氣暖房で自由に暖めることが出來る。だから此冬は殆ど寒いと思つたことはない。のみならず夜間暖か過きて安眠を妨けることが往々ある位だ。風呂は無論內湯があるのみならず浴室內廣く白磁器製の大なる浴槽あり。二三十分にて何時にても出來る。便器も又白磁器製にして淸潔恰も「ホテル」即チ上等旅館に住するが如し。始めて西洋に來た

る心意す。僕の最も好む日本食は毎晩食へる。けれども毎日牛鍋のみで其他は自ら料理せねばならない。好て料理する人が來れば無類だ。こんなことは當てにならない。稀には鰻の蒲燒を料理して呉れる人がある中々旨い。其他一般伯林より氣樂だ。

當地の日本人は四人しか居ない。古株は五ヶ年當地に滯在する渡邊海旭といふ宗教家で、昨春當地に留學した杏雲堂病院令息佐々木隆興學士及び長崎病院出身浦野文雄の三名だ佐々木一人は他に住んで居るが此下宿は矢張日本婆の種類で久しき以前より日本人の住居する處だ。今回は是れで　左樣奈良

K. Sasaki
Wimpfeling strasse 12
Strassburg i. E.

○齋藤義雄君通信

（三月九日東京發十全會宛）

拜啓　今回東都の地で第二回聯合醫學會が開かれ恐らく空前絶後の戰勝後の學會なれば非常の盛會で必ず各地方から列席せらるゝ吾々の恩師先輩同窓諸君も嘸ぞ多かろうと想ひ之を好機として大々的望みを以て聯合醫學會の第二日目に所謂一圓會（金醫出身及之に直接間接に緣故ある醫師を以て組織せられたる會ですが其會名の次第の詳しい事は八田智証君から聞て貰ひたい）を開た頃は櫻花爛熳の日和暖さ春の四月五日時は市景が不夜城の光景に移り變はる晩方から月まで昇る朧夜に花の櫻を眺めて一種の趣きある六時から所は多少邊地の嫌はあつたけれど市中は三錢均一の四通八達の電車の便ある日本橋區龜島町の名から樂し相な階樂園に料理は風變はりにちやん料理但會費は一圓會の名に叛く二圓であつたのは或は不可思議に考へらるゝ方もあろ一多忙の方々にも係はらず定刻を遲しと續々階樂園の一堂に集まれる來會者の芳名を擧ぐれば。

久保武（名古屋）吉田幡誠（廣島）野島茄三郎（富山）林喜久松、田中正一、八田智証、關屋林之助、藤井伊之吉、岡本京太郎、（金澤）君の學會へ列席の爲め地方より上京せられたる九名幷に大井玄洞、安田則人、佐伯勇、敷津林傑、得田易、田原利、玉崎隆三、土岐文二郎、村山有、岩原恒三、神野勇三郎、木下克雄、辻岡律、赤倉喜久雄、桑折直、高橋幸七郎、野嶽利七、島郁誠、林正雄、太田精一、太田長作、江守武、森公平、生沼曹六、森田齊次、近鄕重孝、長澤安弘、江波知輝、橋本監次郎の諸君（在京者の甘九名）に小生と總て卅九名

七時宴を開く幹事開會の挨拶を述べ酣にして久保武君起て本會に對する將來の希望十全會との連絡を忘らざる樣

にと二三の警告的演說あり其他八田智証君鳥郁誠君の卓上演說、大井玄洞翁の有益なる學術的餘興あり殊に近く滿韓の地より凱旋せられたる軍服サーベル先生の多數來會にて快談談笑、實に近來になき非常の盛會であつた十二分の歡を盡して十時散會！

只遺憾であつたのは當日は金澤其他に居らるゝ恩師の一人も來會なかりしは幹事及來會者の稍不滿とする處であつた尙在京者にして各醫學會の會合と衝突の爲め不參の諸君の少なからざりしも幹事に取つては殘念であつたけれども致方のない次第である

尙今回一圓會の事務所を便宜上本鄕區春木町二ノ廿九江波氏方に移したから在京者にして居所變更は勿論上京せられたる十全會員諸君は直に右事務所迄一報を願ひたい

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

會告

○寄贈及交換書目

（五月十九日迄領收之分）

日本醫事週報　五六、九、七〇、一、二、三、八〇、一、二、三、　全　社
醫海時報　六〇七、八、九、一〇、一、二、三、四、五、六、七、八、九、三〇、一、　全　社
東京醫學會雜誌　二〇ノ三、四、五、六、七、八、九、一四四六、七、八、九、五〇、一、二、三、四、五、六、七、八、九、六〇、　全　會
東京醫事新誌　一〇ノ一、二、三、四、　全　局
日本眼科學會雜誌　六二、一、二、三、四、五、六、七、　全　會
中外醫事新報　一四九、五〇、一、　全　社
軍醫學會雜誌　三九六、七、八、九、四〇〇、　全　會
順天堂醫事研究會雜誌　四七、八、九、五〇、　全　會
治療新報　九五、六、七、　全　社
大日本私立衛生會雜誌　二七三、四、五、　全　會
成醫會雜誌　二八七、八、九、九〇、　全　會
衛生談話　六ノ二、三、四、　通俗衛生茶話會
醫談　九九、　全　發行所
齒學研鑽　七ノ一、二、　富安齒科治療所
北海醫報　六ノ一、　北辰病院研究會
京都醫學會雜誌　三ノ一、二、　全　會
臺灣醫學會雜誌　四〇、一、二、三、　全　會
日本婦人科會雜誌　一ノ一、二、　日本婦人科學會
產科婦雜誌　七四、五、六、七、　日本產科婦協會
日本助產新報　九五、六、八、　全　發行所
神經學雜誌　四ノ一、二、五ノ一、二、　日本神經學會
醫學中央雜誌　三六、七、八、九、　全　社
國家醫學會雜誌　三三六、七、八、　全　會
北越醫學會々報　一五一、二、　全　會

中央醫學會雜誌　六六、七
藝備醫事　一一七、八、九、
岡山醫學會雜誌　一九二、三、四、
研瑤會雜誌　七〇、
廣島衛生醫事月報　八六、七、八、
靜岡縣醫學會々報　一四、
鎮西醫報　九六、七
東北醫學會々報　三九、
衛生新報　三一、二、六、七、八、
莊內醫學會々報　四〇、一、二、
躬行會叢誌　二五、六、
校友會雜誌　四〇、
藥學雜誌　二八、八、九、九〇、
臨床藥石新報　九、一〇、一一、一二、
藥石新報　五六、一、二、三、四、五、六、七、八、九、七〇、
治療藥報　七、八、九、一〇、
助產ノ栞　二七、八、九、
校友會々報　九、
校友會々誌　一、
獅子ケ城　三、
東京市教育會雜誌　一八、九、
校友會雜誌　四〇、

全會
藝備醫學會
全會
長崎醫學專門學校會
全社
全會
全社
仙臺醫學專門學校會
全社
全會
京都府立醫學專門學校全會
日本藥學會
藥石新報社
全社
全社
石川縣立第一中學校會
全
石川縣立第四中學校會
全
佐渡中學校
全會
東京開成中學校會
全

學友會雜誌　四、
醫事新聞　七〇、二、三、四、五、六、七、八、九、
日本醫事雜誌索引　三十二年分
北辰會雜誌　四三、
校友會雜誌　二七、
大日本耳鼻咽喉科々報　三ノ一、
好生館醫事研究會雜誌　一三ノ一、
皮能科及泌尿器科雜誌　六ノ一、
校友會雜誌　八、
井上內科新書　卷二　一冊
耳科衛生　全一冊
病理總論　上卷一冊
藥理學　前編一冊

新潟縣村上中學校內會
全
全社
日本醫事年報社
第四高等學校會
全
三重縣立第一中學校會
全
全會
全會
日本皮膚科學會
山口縣立德山中學校會
全
吐鳳堂書店
廣島衛生醫事月報社
吐鳳堂書店
吐鳳堂書店

○十全會々費領收（明治三十九年五月十三日迄）

金貳圓（自三十七年度至三十八年度）二ケ年分　河合鑑君
金四圓（自三十六年度至三十九年度）四ケ年分　片山良作君
金參圓（自三十七年度至三十九年度）三ケ年分　飯塚忠男君
金壹圓（三十七年度一ケ年分）　澤賢吉君
金貳圓（自三十六年度至三十七年度）二ケ年分　山田孝太郎君
金參圓（自三十八年度至四十二年度）五ケ年分　桑折直君

金參圓（自三十九年度至四十三年度五ヶ年分）
金壹圓（三十八年度一ヶ年分）
金參圓（自三十九年度至四十一年度三ヶ年分）
金參圓（仝上）
金參圓（仝上）
金參圓（仝上）
金參圓（仝上）
金參圓（仝上）
金參圓（仝上）
金參圓（自三十八年度至四十二年度五ヶ年分）
金參圓（自三十九年度至四十一年度三ヶ年分）
金參圓（仝上）
金參圓（仝上）
金參圓（仝上）
金參圓（仝上）
金參圓（仝上）
金參圓（仝上）
金參圓（仝上）
金參圓（仝上）
金參圓（仝上）
金參圓（仝上）
金參圓（仝上）
金參圓（仝上）
金參圓（仝上）
金參圓（仝上）
金參圓（仝上）
金參圓（仝上）
金參圓（仝上）
金參圓（仝上）
金參圓（仝上）

赤倉喜八雄君
八田智証君
大河内忠三君
澤田辰造君
堀口眞太郎君
吉尾開道君
松久祐馬君
永田和義君
七五三龜吉君
野嶽利七君
新名藎君
山崎內藏三君
手塚甚之助君
山脇熊人君
屋富祖德次郎君
井本清吉君
柴原外男君
木谷義太郎君
小林吉五郎君
村山貞二君
米澤知造君
平泉泰雄君

金參圓（自三十九年度至四十一年度三ヶ年分）
金參圓（仝上）
金參圓（仝上）
金參圓（仝上）
金參圓（仝上）
金參圓（仝上）
金參圓（仝上）
金參圓（仝上）
金參圓（仝上）
金參圓（仝上）
金參圓（仝上）
金參圓（仝上）
金參圓（仝上）
金參圓（仝上）
金參圓（仝上）
金參圓（仝上）
金參圓（仝上）
金參圓（仝上）
金參圓（仝上）
金參圓（仝上）
金參圓（仝上）
金參圓（仝上）
金參圓（仝上）
金參圓（仝上）
金參圓（仝上）
金參圓（仝上）
金參圓（仝上）
金參圓（仝上）
金參圓（仝上）
金參圓（仝上）

青木市次郎君
酒井利勝君
柳原茂樹君
長村義一君
下條正夫君
富田寛君
藤井茂君
並河正雄君
山內馨二郎君
青山寛之君
北川光雄君
茂居政治君
千秋了君
山口榮君
吉村一馬君
林龍門君
織田秀時君
池野清政君
吉田豐馬君
津田信吉君
小田利吉君
西正胤君

金參圓（全上）岩佐兵藏君
金參圓（全上）松原左武郎君
金參圓（全上）山田章一郎君
金參圓（全上）横山鼎君
金參圓（全上）丹羽玄純君
金參圓（全上）西村順八君
金參圓（全上）久我龜君
金參圓（全上）奥野源治君
金參圓（全上）松原氏献君
金參圓（全上）村山常三郎君
金參圓（全上）石坂直次郎君
金參圓（全上）吉野新八君
金參圓（全上）金子精一君
金參圓（全上）稲田謹君
金參圓（全上）金岡清彦君
金參圓（全上）勝股亨君
金參圓（全上）久田德君
金參圓（全上）馬淵眞澄君
金參圓（全上）森義作君
金參圓（全上）渡邊復介君
金參圓（全上）松本文二君
金參圓（全上）藤井保二君

金參圓（全上）丹羽直君
金參圓（全上）吉武安男君
金參圓（全上）笹岡芳名君
金參圓（全上）橋内兵治君
金參圓（全上）中谷正範君
金參圓（全上）秦親眞君
金參圓（全上）土屋米二君
金參圓（全上）伊藤二郎君
金參圓（全上）内海友七君
金參圓（全上）武内節三君
金參圓（全上）樋口平次君
金參圓（全上）小高御四郎君
金參圓（全上）原久男君
金參圓（全上）本城熊三郎君
金參圓（全上）岡一雄君
金參圓（全上）桑島柳吉君
金參圓（全上）足立諒君
金參圓（全上）坂井茂君
金參圓（全上）鈴木俊定君
金參圓（全上）柴田順三君
金參圓（全上）小野林利一君
金參圓（全上）名越貫一君

金參圓（自三十九年度至四十一年度三ヶ年分）　田中義雄君
金參圓（仝上）　黑木隆君
金參圓（仝上）　高桑勇次郎君
金參圓（仝上）　戸井源吉君
金參圓（仝上）　西村政吉君
金參圓（自三十九年度至四十二年度五ヶ年分）　高柳元六郎君
金參圓（自三十九年度至四十一年度三ヶ年分）　吉川幸作君
金參圓（仝上）　小出貞次郎君
金參圓（仝上）　井上元君
金參圓（自三十八年度至四十二年度五ヶ年分）　山田孝太郎君

○稟告

會計整理上參拾五年度以後校外特別會員ニシテ會費未納ノ諸君ハ此際速カニ納付相成度候也

明治三十九年五月　十全會

告

次號原稿ノ切　六月五日

十全會雜誌部

○前號正誤

前號誌上故河野通夫君在學紀念書籍費決算報告中白井丈吉君とあるは白井濟君の誤植なり茲に訂正して其の粗漏を謝す

綠陰深鎖釣魚磯　嵐氣溟濛細雨飛
驚得游魚都遇去　落花紅撲短簑衣

雨城

佐々木金子両教授寫眞額製作方へ

寄附金第三回報告（五月十八日迄ノ分）

一金壹圓　飯森益太郎君

一金壹圓　森島彦夫君

一金壹圓　高松岩吉君

一金壹圓　政山龍雄君

一金六拾錢　生沼曹六君

小計金四圓六拾錢

合計金四拾七圓七拾錢

右報告候也

明治三十九年五月十八日

發起人

佐々木金子両教授寫眞額製作

計算報告

一金四拾七圓七拾錢　有志寄附金總額

一金八圓　金牌製造殘金學生有志ヨリ寄附ノ分

合計金五拾五圓七拾錢

支出

一金四拾圓　白金シユソウシ全紙形寫眞引延二枚硝子入額二個代

一金四圓　寄附金方照會用往復葉書及通常葉書代

一金貳圓拾錢　報告用通信費參錢切手七拾枚

一金壹圓　狀袋用紙其他雜費

合計金四拾七圓拾錢

殘額金八圓六拾錢ハ　内科學及小兒科學購求ノ上十全會へ寄附仕候

右報告候也

明治三十九年五月十八日

發起人總代　三木三郎

▲藥理學前篇增訂三版出版▼

福岡醫科大學教授 醫學博士 林春雄先生著

增訂三版 藥理學

前篇 正價金壹圓貳拾錢 郵稅金八錢

後篇 正價金壹圓四拾錢 郵稅金八錢

藥理學ノ必須ノ學問タルヿハ近來世ノ學者ノ等シク認ムル所トナリ、本書ノ如キモ第二版刊行後一年ヲ經ズシテ既ニ讀者ノ需用ニ應ズルコト能ハザルニ至リヌ。此時ニ當リテ著者恰モ其官遊ヲ了リテ獨逸ヨリ歸ル。即直ニ其許ニ馳セ行キテ增訂ヲ乞ヒシニ、勤勉ナル著者ハ笈ヲ下スノ暇ナク、一氣呵成ニ其業ヲ了リ、茲ニ第三版ヲ發售スルニ至レリ、依テ茲ニ弘告シテ高需ヲ待ツ

●發行元 東京市本郷區龍岡町卅四番地〔電話下谷一六七二番〕 吐鳳堂書店

▲斬新內科書第二卷發賣▼

千葉醫學專門學校教授 醫學博士 井上善次郎先生著

井上內科新書

全四册

圖畫插入

堅牢本綴

●第二卷（呼吸、循環、泌尿、生殖器病篇）新刊 正價貳圓貳拾錢●郵稅拾五錢

●第一卷（消化器病篇）既刊 正價二圓拾錢 郵稅十五錢 ●第三卷（神經全身病篇）續出

本書ノ刊行ハ既ニ我邦內科學界ノ耳目ヲ聳動シ、學者互ニ其繙讀ノ速キヲ競ヒ第一卷刊行後讀者ノ續刊ヲ望ムコト大旱ノ雲霓モ啻ナラズ。著者モ亦讀者ノ希望ニ負カザランコトヲ期シ、夙夜黽勉少シモ筆ヲ措カズ、玆ニ第二卷ノ印刷成リ發售スルニ至リヌ、第一卷ニ於テ經驗ヲ得タル著者ハ第二卷ノ執筆ニ當リテ更ニ工夫スル所アリ、其說ク所漸ク蔗境ニ入リ、殊ニ肺結核ノ如キハ其一章ノミニテ殆八十頁ヲ費シ所謂「必要ナル病症ハ細叙ス」トノ序言ニ副ハシメタリ。此一事以テ本卷ノ內容ヲ窺フニ足ルベシ。江湖諸君購求ノ期ヲ逸スルナカレ。

●發行元 東京市本郷區龍岡町卅四番地〔電話下谷一六七二番〕 吐鳳堂書店

▲最新病理書上卷出版▼

大坂高等醫學校教諭田中祐吉先生著

病理總論

全三册

挿圖 夥多

●上卷（誘導論、疾病論、循環障碍論、榮養障碍論）新刊　正價壹圓四拾錢●郵稅八錢

●中卷（炎症論、腫瘍論）出版期日卅九年四月中　●下卷（病原論）出版期日同六月中

○本書ハ多年病理學ヲ研鑽シ、大阪高等醫學校福岡醫科大學ノ病理教室ニ歷任シテ斯學ノ業蹟ニ富メル新進ノ病理學者田中先生ガ、汎ク內外ノ原著成書ヲ涉獵シ、之ニ自家ノ實驗研究ヲ參酌シテ學生諸氏ニ講述セラレタル稿本ヲ基礎トシ、幾多ノ增補改訂ヲ加ヘラレタル一書ナリ○本書ハ平易ナル文章ヲ以テ深遠ナル斯學ノ理論ヲ解說シ且ツ精巧ナル多數ノ圖畫ヲ添加セルヲ以テ、讀者ハ之ニ就テ容易ニ斯學ノ綱要ヲ了解シ得ヘク又實驗研究ノ指針トナスヲ得ヘシ○本書ノ特色トスル所ハ、所說ノ簡潔正確ニシテ毫モ繁雜冗漫ニ流レザルヿ、文章ノ流暢明快ニシテ理解シ易キヿ、挿圖ノ夥多ニシテ且ツ精緻ナルヿ、新說ヲ紹介スルニ勉メラレタルヿ等ニシテ蓋シ近時ノ好著タルヿヲ疑ハズ、○本書ハ醫學專門學校學生諸氏ノ參考書又文部省受驗者諸氏ノ素修用ニ最モ適切ナル良書トシテ爰ニ江湖ニ推薦ス

發行所　東京市本郷區龍岡町卅四番地（電話下谷一六七二番）　吐鳳堂書店

金澤醫學專門學校

十全會會則摘要

（明治三十八年五月改正ス）

一本會ハ本校職員、卒業生、學生及本校ニ縁故アル者ヨリ成リ職員及卒業生ヲ特別會員トシ學生ヲ通常會員トシ本校ニ縁故アル者ヲ賛助會員トス

本校職員卒業生及學生ハ總テ本會會員タルノ義務アルモノトス

一本會ニ講話部、雜誌部、學術實習部、遊技部、劍道部、柔道部及弓術部ノ七部ヲ置ク

一本會一切ノ經費ハ特別會員及通常會員ノ負擔トス

本校職員タル特別會員（校内特別會員）ハ會費トシテ相當ノ金額ヲ寄附スベキモノトス

本校卒業生タル特別會員（校外特別會員）ハ會費トシテ一ケ年金壹圓ヲ納ムベシ但シ一時ニ金參圓ヲ納ムル者ハ五ケ年ヲ一期トシ該期間本會發行ノ雜誌ヲ配布ス

將來卒業ノ特別會員ハ最終授業料納付ノ節必ス一時ニ三ケ年間ノ會費金參圓ヲ納ムベシ

通常會員ハ會費トシテ一ケ年金壹圓五拾錢ヲ納ムベシ

特別會員ニシテ引續キ三ケ年間會費未納者ハ除名ノ上一般會員ニ通告ス

一本會ノ會計年度ハ毎年九月ニ始リ翌年八月ニ終ル

一講話部ニ於テハ毎年一回以上講師ヲ聘シテ道義上ノ講話ヲ聽聞シ又隔月一回醫學及藥學ニ關スル講談會ヲ開ク

講話部ニ於テハ特ニ語學會ヲ開クコトアリ

一雜誌部ニ於テハ毎年五回醫學及藥學ニ關スル會員ノ演說談話並ニ本校ノ現況、會員ノ動靜等ヲ記載シタル雜誌ヲ發行シテ會員ニ頒ツ

雜誌部ニ於テハ本會所屬ノ圖書ヲ管理ス

一學術實習部ニ於テハ專ラ小野慈善院ノ患者ニ就キ診察治療ヲナシ學生ヲシテ臨床實習及調劑實習ヲナサシム

（運動部規定ニ關スル規定摘要ハ畧ス）

▲投稿心得七則▼

一投稿用紙は中折紙を用ゐ必ず楷書たるべし殊に洋字は字體を明かに記入せらるべし

一端書洋紙等に認めたるもの又は字體亂雜なるものは總て没書とす

一誌上匿名を望まるゝも原稿には必ず住所姓名を記入せらるべし

一言の政治に渉り或は德義に背くものは一切登載せず

一未完の原稿は採錄せず

一原稿採否の權は編輯長にあり

一一旦寄送せられたる原稿は返戻の需めあるも之に應せず

十全會雜誌部

明治三十九年五月二十四日印刷
明治三十九年五月二十八日發行

編輯兼發行者　石川縣金澤市廣坂通新道二十六番地　森島彦夫

印刷者　石川縣金澤市尾張町八十二番地　宇野孝太郎

印刷所　同所　活文堂　電話【六十五番】

發行所　金澤醫學專門學校十全會